

2 回目の列状間伐を通じた列状間伐の普及に向けて

四国森林管理局 高知中部森林管理署 主任森林整備官 齋藤 公平
森林整備部 資源活用課 生産係長 水田 英司

1 課題を取り上げた背景

列状間伐は、国有林の利用間伐において積極的に推進されていますが、林道の整備状況や高性能林業機械の導入実績などにより列状間伐の実施状況は地域毎に大きく異なっています。四国の地形は急峻な場所が多く（人工林平均林地傾斜 30 度）、全国に比べると搬出コストが高い状況にあります。しかし近年、高



列状間伐実施箇所

性能林業機械も人工林 1 万 ha に対し 9.0 台（全国平均 8.8 台）導入されており、車両系による集材も増加しています。また、相次ぐ大型製材工場、木質バイオマス発電所の稼働に対応して、四国の原木生産量は増加しており、H25 年度に比べて 28% 増加の 167 万 m³ に達しています（H29 年度統計）。

2 取組の経過

このような状況下、列状間伐については民有林、国有林共に普及が進んできていますが、一方では、点状間伐に慣れている林業事業者や森林所有者から「列状間伐は見映えが悪い」「間伐効果は果たしてあるのか」といった声が絶えません。

このため、四国森林管理局では、2 回目の列状間伐を実施した林分を対象とした列状間伐現地検討会を昨年度から延べ 6 回開催し、林業事業者や県・市町村職員等から約 400 人の参加がありました。

3 実行結果

2 回目の列状間伐を実施した結果、微地形や林況に応じた間伐方法（クロス状）等によって間伐木が部分的に集中することを避けることが出来、定性間伐とほとんど変わらない均等な林分となりました。

現地検討会では、列状間伐を実施したことがない事業者や既の実施している経験豊富な事業者の方など、様々な方と意見交換をしました。参加者からは、「かかり木等の伐倒時の安全性や生産性が高いため積極的に実施したい」「2 回目の列状間伐でクロス状に間伐するのは新たな発見」「クロス列集材の場合、斜面下方の残存木について注意が必要」などの意見が出ましたが、一方では見えてきた課題として、



1 回目・2 回目の伐採列

- ① 選木の手間は少ないが、複雑な地形が多い現場では列の設定を行う際に手間がかかる。
- ② 急傾斜地でスギを伐採する場合、伐採列を林道等から直角に入れると伐倒木が滑りやすくなるため、集材しづらくなる。
- ③ 列状間伐は定性間伐に比べ風倒被害が多く感じるため、台風銀座と呼ばれる四国で実施するには抵抗があり難しく感じる。などの意見もありました。

4 まとめ

今後とも現地検討会を積極的に開催し、現地の実態に合った列状間伐を様々な手法によって推進していきたいと考えています。